

『社会調和の知識を社会思考の軸にもて』

～全体と個の視点から～



北海学園大学経営学部・大学院経営学研究科教授 大平 義隆
(北海道生産性本部 理事)

古来から、何処であっても、人々の営みは必ず全体と個が問題となる。全体の目的と個々人の目的は必ずしも一致しないからである。即ち、社会、集団などの全体と、構成する個はその目的において調和する必要がある。したがって、安定した社会では何らかの個と全体の調和の仕組みが存在し、教育などのさまざまな社会的な制度に反映され、形成維持されているのである。はっきりとした自分の意見を高く尊重する社会と、自分の意見を述べることを自己主張が強い身勝手な人と見る社会があるだろう。米国は訴訟社会といわれるほど自己主張のはっきりした社会であるから、授業中にわからないことをそのままにはせず質問をする。この行為は、自分が授業に強く関心のあることの主張ともなっている。わが国の職場では、病欠者の穴をみなで埋める。したがって病欠はみなに迷惑をかけることになる。かつて、過密労働をする理由を尋ねたときに、多くの回答に「仲間に迷惑がかかる」があった。わが国民の多くは、周囲に気を配りながら行動するのであろう。授業中に質問する学生が韓国の大学と比べてもひどく少ないようを感じるわが国の学生は、人前で手を上げて質問することを「恥ずかしい」と感じている。学生は、分からぬことを分かろうとするよりも、周囲が気になるのである。

社会とは個と全体が調和している状況のことである。個と全体の調和の仕組みを論理的に考えると、個の抑制または促進、全体の抑制または促進の組み合わせからなっていると考えることができよう。個の促進とは、個人に発言の機会を多く与え、発言に高い評価を置く社会的相互作用などのことである。個の抑制とは、上意下達的服従的な態度で、自己主張をわがままと位置づける社会的相互作用などのことである。全体の促進とは、気働き、察しを重視し、自己犠牲を尊ぶ社会的相互作用などのことである。全体の抑制とは、物まねをする態度を戒める社会的相互作用などのことである。そこで、個を尊重する社会の調和は、個の促進と全体の抑制の組み合わせになり、全体を尊重する社会は、個の抑制と全体の促進の組み合わせになろう。

世の中にはさまざまな社会があるが、それぞれの社会で、どちらかを優先する組み合わせを形成し維持する社会的な制度が出来ている。これに時間の流れという変化要因がくわわるので、組み合わせは変化にあったコントロールも不可欠となる。

社会調和のメカニズムに従って人や集団が行動することを軸にしながら世の中や世界の現象をながめると、意外と多くのことを正確に理解することができるかもしれない。この軸はわれわれにとってかなり重要な軸となると私は考えているからである。